

# 暮らしの変化～住みやすい便利な家へ～

前の節までに、100年以上前の住宅を見ましたが、建てられた当時と全く同じ家に住んで同じ生活することは現在ではなかなか難しいことです。この100年間で人々の生活がどのように変わったのか、それにもなって家がどのように変化したのか見てみましょう。そして今の生活の便利さを知るなかで、昔の生活のよい点は何か考えてみましょう。

## 戦後までの暮らし

江戸時代以前から戦後まで何百年もの間、人々の暮らしはほとんど変化がありませんでした。

現在のように電気がない時代は、昼間でもうす暗く、冬場は寒い家に住んでいました。井戸から水をくみ、「かまど」で調理をし、「いろり」の周りに家族が集まって暖をとりながら食事をしました。土間には運搬や農耕のための馬や牛がいました。

一人や一家族では不可能なことが多かったので、家族のきずなを大切に、農作業や土木工事などでは隣近所や村全体で助け合いながら生活をしていました。

## 大きな変化は昭和30年代から

昭和30年代以降になって、急に生活水準が大きく変化し、電気、上下水道、ガスが整備され、便利な生活になりました。また自動車、テレビ、冷蔵庫、洗濯機といったものが現れ、現在のような生活になりました。

## 今までの建物の増築、改築、新築の流れ

子供や孫が産まれたり、成長して大きくなったりすると、新しい部屋が必要になります。明治・大正時代には主屋の隣に「離れ」を増築し、お年寄り夫婦が離れに隠居して住むことが流行しました。今でいう2世帯住宅の始まりです。

また戦後（昭和20年代以降）、農林省より「生活改善運動」という農村の生活を良くしようという政策が出されました。それによって、農家はお勝手（台所）のいろり・かまどを取り壊し、使いやすい台所に改築しました。

さらに昭和40年代以降になると、今度は離れの例とは逆に、古い主屋とは別に裏側に新しい主屋を建て、そこに若い夫婦が移り住むようになりました。

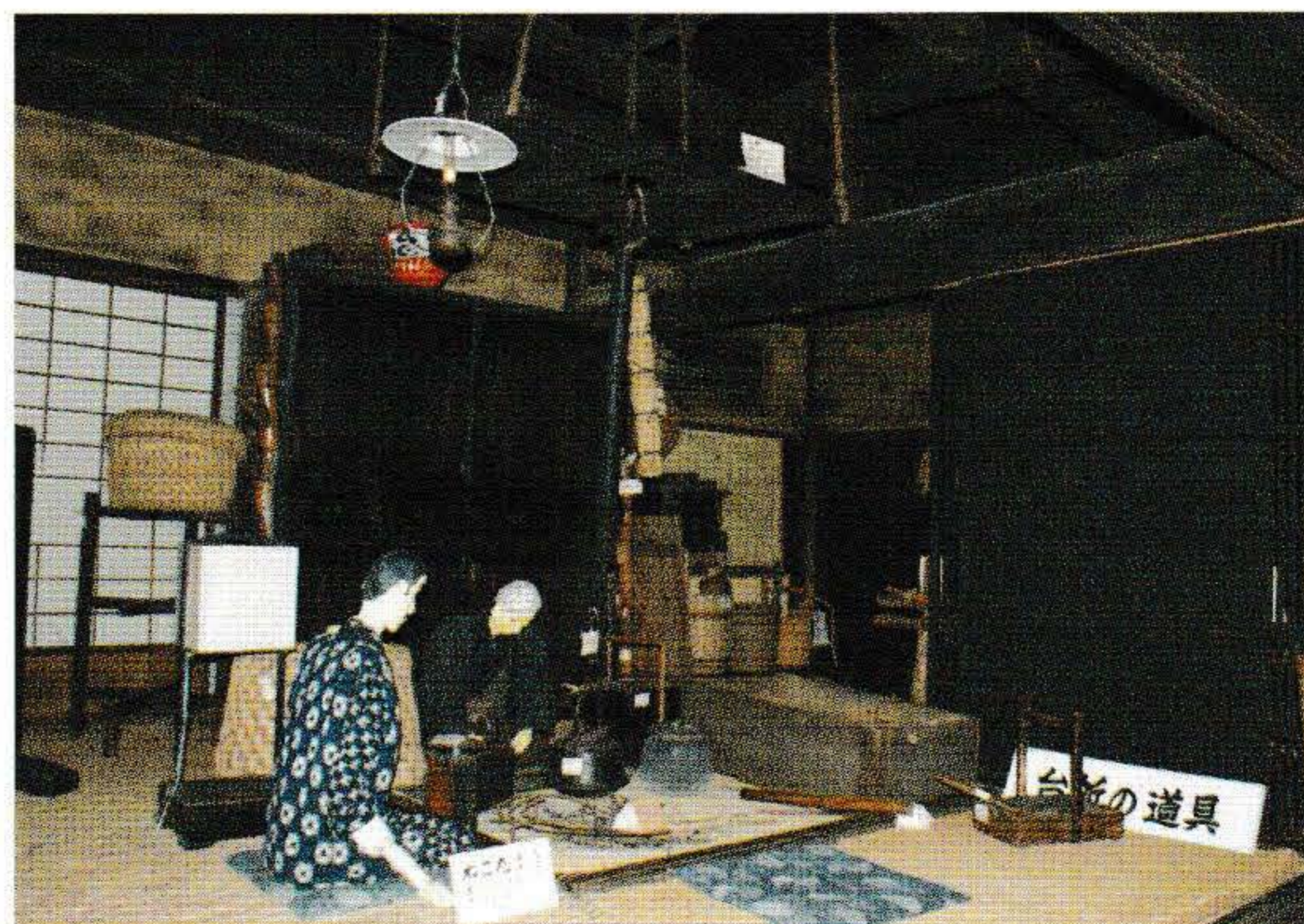
同じ家の敷地の中に、年代や大きさのちがう建物を建てながら、家を守ってきました。

## 現在の建て替え、再生

最近になって、建物が古くなったために取り壊されたものもあります。建物がなくなるということは、風景が大きく変わってしまいます。座光寺でもこの10年、20年間で失われた建物がたくさんあり、大きく風景が変わっています。昔はどこに何があったのか、お年寄りの方に聞いてみましょう。

反対に、家は遠い先祖から受け継がれた大事な物と考えて、現在の最新の技術で修理・改築して残す建物もあります。これを最近では「古民家再生」ということもあります。建物を取り壊さないで、家の中の部屋の大きさや配置を変えて住みやすくする方法です。

便利さだけが生活の豊かさとは限りません。家に受け継がれた文化や習慣を守り、古いものの良さを理解しながら新しいものを創造することも生活の豊かさの一つかもしれません。（金澤雄記）



いろりを囲んでの生活風景  
高森町歴史民俗資料館「時の駅」展示

